

根治目的ではない治療を受ける進行がん患者の 「生きることへの思い」に関する文献検討

森下純子¹ 茂田玲子¹ 冨田亜沙子¹ 矢富有見子¹ 井上智子¹

1 国立看護大学校
morishitaj@adm.ncn.ac.jp

Review of Literatures on "Thoughts to Living" in Advanced Cancer Patients Undergoing Treatment That Is not Radical.

MORISHITA Junko¹ SHIGETA Reiko¹ TOMITA Asako¹ YATOMI Yumiko¹ INOUE Tomoko¹

1 National College of Nursing, Japan

[Abstract] The objective of the current study was to clarify "thoughts to living" for advanced cancer patients who get treatment without the purpose of radical cure. With retrieval keywords of "cancer", "patient", "treatment" and "desire to live", "live", "hope", "experience", or "thought", 28 literatures were extracted as subjects from the Ichu-shi Web. As a result of qualitative and inductive analysis on codes selected from each literature, 11 categories were generated. They consisted of four categories regarding life and death including "intensely conscious about limited life" and "desire to live", five categories regarding treatment including "rely on treatment for survival", "no choice but to receive endless treatment" and "want to be released from pain of treatment" and two categories regarding relationship with compromise on oneself, "want to keep this state and live as long as possible" and "continuously encourage oneself to be able to survive". Patients have various thoughts to living. In particular, the thoughts related to treatment were complex.

[Keywords] 根治的治療 radical treatment, 進行がん患者 advanced cancer patient, 生きること living, 化学療法 chemotherapy, 放射線療法 radiation therapy

I. 緒言

近年のがんの診断ならびに治療技術の発展は目覚ましく、根治を目指すことが可能になった。しかしながら、早期発見自体が難しい、あるいは外科切除や根治的な治療を施しても再発率が高いがん種においては、未だ難治の経過を辿っている。これらの進行がんの標準治療は、化学療法や放射線療法が主となる。進行がんに対して行う化学療法や放射線療法は、それ単独で根治を目指すことは難しいが、奏効することによってがんの進行を抑制し延命効果が期待できる（一般社団法人日本がん看護学会教育・研究活動委員会コアカリキュラム ワーキンググループ, 2017）。化学療法の多剤併用療法による抗腫瘍効果の拡大や免疫チェックポイント阻害薬の臨床応用、放射線療法の高精度な機器の開発などが進行中（Japan clinical oncology group, 2019）で、今後は根治目的ではない治療を継続している進行がん患者の数は増加の一途を辿ることが予測される。

がんと診断されたとき、特に進行がんで根治が難しい

人々は、否応なしに死と対峙することになる。がん対策推進基本法が成立した2006年頃から緩和医療が拡大し、終末期に携わる医療者はこれまで以上に死を意識して患者に向き合い（村田, 2011）、患者の生活の質を最大限に維持することに加えて、患者にとってのより良い死の体現という目標に移行した（明智, 2018）といえる。日本人が共通して重要だと考える「望ましい死（good death）」を明らかにした研究では、身体的、心理的な苦痛がないことや、望んだ場所で過ごすことなど10の概念が同定されている（Hirai et al., 2006）。さらに、がん患者はあらゆる過程においてさまざまな精神症状を抱えており、サイコオンコロジーの重要性も認識されるようになった（明智, 2018）。このように、終末期を中心に根治が難しいとされた患者への支援が充実した一方、医療者は根治的治療を受ける患者以外の進行がん患者をいずれ死にゆく人として捉えるようになったことも否めない。

先述した「望ましい死（good death）」の概念の1つには、死とは相反する「希望をもって生きること」が含まれ

ている。希望をもって生きることは、がんという病気に適応し心理的な苦痛を軽減し、心理社会的 well-being や QOL を高めるために個々を支援する重要な要素であると示唆されている (McClement et al., 2008)。また、The Health Hope Scale を用いた調査では、進行がん患者であっても高いレベルの希望を維持していることが明らかにされている (Felder, 2004)。しかし、化学療法や放射線療法を受ける患者は、治療効果に加えて、心身の症状や生活、将来などさまざまな側面で不確かさを抱きながら (長坂ら, 2013; 三本ら, 2012) 治療に臨んでおり、医療者に生き延びることを支えてほしいという潜在的なニーズを抱いている (川崎, 2011)。

本邦において「生きること」すなわち生命を保つ、生存する (広辞苑, 2018) ことに関する研究は、死を意識する病を抱える患者の死生観 (京田, 2010) や病を抱える患者の生き方・生きる意味 (青木, 2008)、がん患者の化学療法継続の原動力 (西川, 2015) やスピリチュアルペイン (木庭, 2017) などの文献検討が行われている。しかしながら、がん患者の治療過程における「生きることへの思い」については、先に述べたように体験や希望の研究の一部として記述されているのみで、特に根治目的ではない治療を受ける進行がん患者の「生きることへの思い」について質的にまとめた研究は見当たらない。これらの患者が生きることに對してどのような思いを抱いているのかを明らかにすることは、患者理解を深めるための一助となり、患者の思いに寄り添った看護支援への示唆を得ることができると考える。

II. 目的

根治目的ではない治療を受ける進行がん患者にとっての「生きることへの思い」とはどのようなことなのかを質的研究による文献を検討することによって明らかにする。

III. 用語の定義

1. 根治目的ではない治療

各がん種の診療ガイドラインに記されたがんに対して直接作用する標準治療のうち、根治を目的としないが医療者と患者の双方の同意のもと行われる最適な治療のこととする。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

文献検討

2. 対象文献の検索および選定

文献の選定方法を図1に示す。進行がん患者の「生きることへの思い」に関する記述は、個々人の思いや考え方が基盤となるが、文化や宗教、経済、生活習慣などにも影響を受ける (京田ら, 2010) ため、本研究では国内論文のみを対象とした。また、がん治療の開発は約10年間で劇的に進歩し生存期間の延長に寄与していることから、検索年数を2008年1月から2019年7月に限定することとした。

文献データベースは医学中央雑誌 Web 版 (以下、医中誌) を用いて検索した (検索日: 2019年8月)。進行がん患者の「生きることへの思い」に関する記述は、体験や希望を扱った研究など多岐に渡るため、キーワードを「がん (腫瘍/TH or がん/AL)」and「患者」and「治療」and「(生きたい or 生きる or 希望 or 体験 ((語り/TH or 体験/AL) or (体験記/TH or 体験/AL))) or 思い ((感情/TH or 思い/AL) or (語り/TH or 思い/AL))」とし、看護と原著論文で絞り込み検索を行った。その結果1332件が検索され、さらに治癒や延命、寛解を目指す積極的な治療の対象とならない「終末期」を除いた832件が抽出された。重複を確認し、事例研究および質的研究以外の文献を除外した結果166件となった。

文献の選定は、上記166件の中から論文のタイトルとアブストラクトを確認し、成人期とは発達段階が大きく異なる「後期高齢者」と「小児期」を対象とする論文を除いた。加えて、対象者が「家族」「看護師」である論文を除外し61件を抽出した。さらに本文を精読し、①根治目的ではない治療を受ける進行がん患者を対象としている、②患者の「生きることへの思い」に関する記述がある、③学術論文として形式が整っている論文を採用した。最終的にハンドサーチした論文を加えて28文献を分析対象とした。

3. 分析方法

1) データ分析

質的帰納的に分析した。まず論文の内容を精読し、患者の「生きることへの思い」について記述されているサブカテゴリーを中心に抽出しコードとした。論文中にサブカテゴリーが明示されていない場合には、共同研究者間で抽象度を検討し、意味内容を表している部分を忠実に抽出するよう努めた。さらにコードから内容の類似性とともに、「生きることへの思い」の表現の複雑性を検討しながら分類し、抽象度を上げて本分析におけるサブカテゴリー、カテゴリーを新たに作成した。

2) 分析の信頼性の確保

各論文の記述の抽出とコード化、カテゴリー分類について本研究メンバーで繰り返し検討を行い、分析の信頼性の確保に努めた。

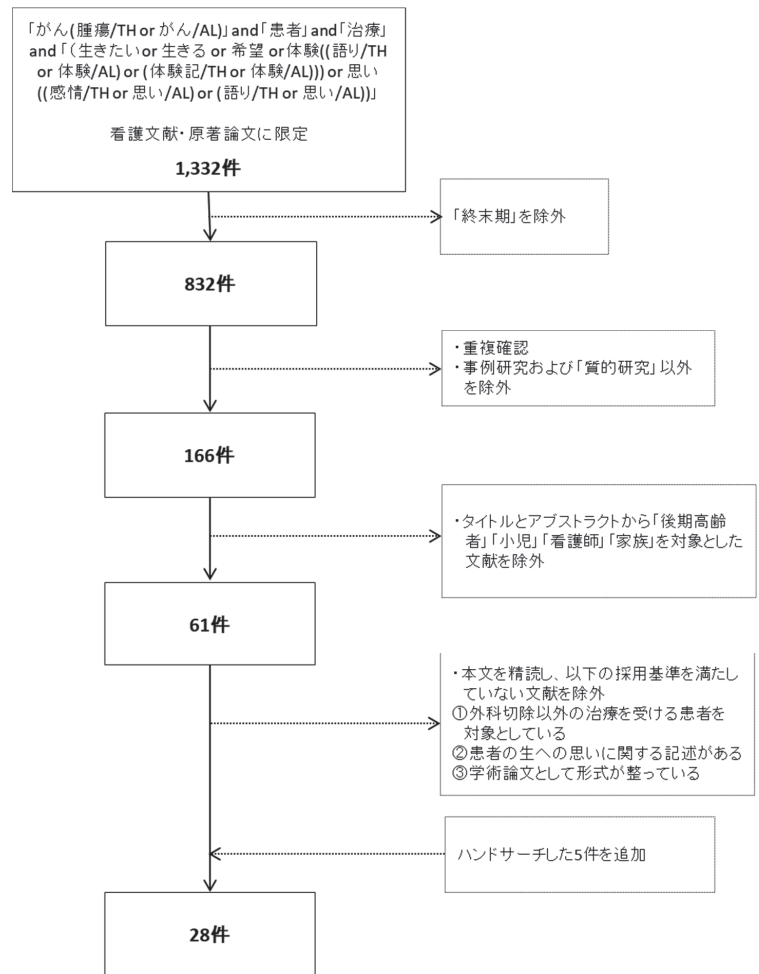


図 1. 文献の選定方法

V. 結果

1. 対象文献の概要

対象文献となった28件の概要を表1に示す。論文の種類、分析方法は雑誌によってさまざまであったため、論文から忠実に記述することとした。論文の種類は、原著論文13件、研究報告10件、資料・短報・その他5件であった。分析方法は、質的記述的または帰納的17件、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)3件、現象学的アプローチ3件、内容分析2件、KJ法2件、グラウンデッド・セオリー法(GT)1件であった。

各文献の対象者の背景は、がん種が消化器系8件、呼吸器系7件、造血器系3件、乳腺系1件、脳神経系1件、さまざまながん種を混合して扱ったものが8件であった。治療法は、化学療法のみが20件、化学療法や化学放射線療法、放射線療法などを扱ったものが6件、その他1件、記述がなかったものが1件であった。また、対象者の年代は20代から80代までと多様であった。

2. 根治目的ではない治療を受ける進行がん患者の「生きることへの思い」に関する分析結果

対象となった28文献の研究内容から143コードを抽出し、意味内容の類似性に基づき34サブカテゴリーから11カテゴリーを生成した。根治目的ではない治療を受ける進行がん患者の「生きることへの思い」に関するカテゴリーは、生死に関連したカテゴリー、治療に関連したカテゴリー、自己の折り合いに関連したカテゴリーの3つに大別された。以下、3つの分類ごとにカテゴリーを説明する。カテゴリー【】, サブカテゴリー< >として示す。

1) 生死に関連したカテゴリー (表2)

生死に関連したカテゴリーは、【命の限りを強く意識する】【死の思考が現実味を帯びる】【生きていたい】【死にたくない】の4カテゴリーであった。

患者は<残された時間を推測して人生を考える>など【命の限りを強く意識】し、<死ぬかもしれない><未来が想像できない>と【死の思考が現実味を帯び】ていた。また、<誰かのために生き続けたい><生き抜きたい>という複数の表現で【生きていたい】と生を希求するとともに

表 1. 対象文献一覧

NO.	論文タイトル	著者名	対象者の がん種/治療法	分析方法	発行 年	論文の種類
1	診断から治療過程におけるがん患者のゆらぎの対処	塚本 仁美ら	混合/化学療法	質的記述的または 帰納的	2018	原著論文
2	外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きがい	下出 真規子ら	消化器系/化学療法	質的記述的または 帰納的	2018	研究報告
3	進行肺がん患者が初回化学療法を受ける時期に抱く思い	太田 亜紀子ら	呼吸器系/化学療法	質的記述的または 帰納的	2018	研究報告
4	進行膵臓がん患者の積極的治療継続の決定に至る過程	内藤 加奈子ら	消化器系/化学療法	M-GTA	2017	要約
5	がんの再発あるいは転移を診断された乳がん患者の思い	新井 敏子	乳腺系/化学療法 (ホルモン療法含む)	質的記述的または 帰納的	2017	研究
6	転移のある高齢がん患者の治療に対する納得の要素	今井 芳枝ら	混合/化学療法 または化学放射線療法	内容分析	2016	原著論文
7	化学療法を受けている進行膵がん患者の療養生活における体験 手術適応にならなかった患者を対象として	千崎 美登子	消化器系/化学療法	質的記述的または 帰納的	2016	研究報告
8	進行肺がん患者の退院支援における意思決定の影響要因	志和 知華ら	呼吸器系/記述なし	質的記述的または 帰納的	2016	短報
9	外来化学療法を受けている高齢がん患者の療養生活の現状	奥村 美奈子ら	混合/化学療法	質的記述的または 帰納的	2016	資料
10	死を認知した再発・進行がん患者が希望を見いだすプロセス	角田 明美ら	消化器系/化学療法	M-GTA	2016	原著論文
11	診断から初回治療導入期における肺がん患者の不確かさの管理	笹井 知子ら	呼吸器系/化学療法 または化学放射線療法	質的記述的または 帰納的	2016	原著論文
12	がん疼痛のある進行肺がん患者の情動体験	山中 政子ら	呼吸器系/化学療法 または化学放射線療法、 放射線療法	KJ法	2016	原著論文
13	再発肝臓がん患者の状況認識	小原 佑佳ら	消化器系/その他	質的記述的または 帰納的	2016	研究報告
14	初回治療段階にある中年期の悪性神経腫患者の体験のゆらぎ	梅田 尚子ら	脳神経系/化学療法 または化学放射線療法	M-GTA	2015	原著論文
15	外来で治療を受けるがん患者の希望を見出すプロセス	上田 由喜子	混合/化学療法	質的記述的または 帰納的	2015	研究報告
16	進行肺がん患者の病いの体験の意味づけに関する研究	竹山 広美ら	呼吸器系/化学療法	質的記述的または 帰納的	2015	研究報告
17	化学療法を受けている再発がん患者の希望の維持に影響する ソーシャル・サポート	神谷 潤子	混合/化学療法	質的記述的または 帰納的	2015	研究報告
18	オキシプラチンによる末梢神経障害をもつ進行再発大腸がん患者 の体験	三木 幸代ら	消化器系/化学療法	質的記述的または 帰納的	2014	研究報告
19	難治性のがんを生き抜くー膵がん患者の語りー	吉田 みつ子	消化器系/化学療法	現象学的アプローチ	2014	研究報告
20	外来化学療法中のがん患者の在宅療養生活としたい	平原 優美ら	混合/化学療法	質的記述的または 帰納的	2013	原著論文
21	急性白血病患者における臨床試験参加の意思決定プロセス	熊谷 理恵ら	造血器系/化学療法	質的記述的または 帰納的	2013	原著論文
22	がん治療を受けながら下降期を生きる人々の自己の回復	天野 薫ら	消化器系/化学療法	KJ法	2012	原著論文
23	再発・転移後のがん患者が見いだす希望とその希望を見いだす ための要因	田中 いずみ	混合/化学療法 または放射線療法	質的記述的または 帰納的	2012	原著論文
24	化学療法を受ける再発白血病患者の有害事象への対処行動	井ノ下 心ら	造血器系/化学療法	GT	2012	研究報告
25	標準的治療を受けている進行非小細胞肺がん患者の自己の見通し を持つ体験	濱田 珠美ら	呼吸器系/化学療法	現象学的アプローチ	2011	短報
26	呼吸困難を抱える治療期進行肺がん患者の体験	橋本 晴美ら	呼吸器系/化学療法 または化学放射線療法、 放射線療法	内容分析	2011	原著論文
27	外来化学療法を受ける患者にとつての悪性リンパ腫とともに生きる 体験	許田 志津子ら	造血器系/化学療法	現象学的アプローチ	2011	原著論文
28	外来化学療法を受けるがん患者の“前に向かう力”	北添 可奈子ら	混合/化学療法	質的記述的または 帰納的	2008	原著論文

表 2. 生死に関連したカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	*文献番号	
命の限りを強く意識する	自分の命の限りを認識する	思っていたより人生の終わりが近い	23	
		生の限りや生のもろさとして、近い将来に在る自分自身の生の有限性を現実的意味で理解する	25	
		がんが“過去の体験”にならず、限定された未来がある	19	
	残された時間を推測して人生を考える	残された時間を推測して人生を考える	残された時間を充実させるために一生懸命生きる	28
			残された人生の過ごし方を考えること	8
			死の覚悟がつき、やるべきことを見出す	23
			いのちの限界を感じるからこそ前向きに生きたい	10
			死を見越した医療	19
			呼吸困難の出現により増大した死もあり得るという危惧	26
			再発転移のショックがあり、死を意識する	5
死の思考が現実味を帯びる	死ぬかもしれない	まだ生きられると思うが、更なる転移の恐れを考える	5	
		死を覚悟したこと	1	
		肺がんは死を避けられないと思う	3	
		死ぬ気がしない	19	
		未来が想像できない	15	
	生きていたい	生き続けたい	長く生きていたい	17
			長生きしたい	8
			生存していく	21
		誰かのために生き続けたい	それでもやっぱり生きたい	4
			子どもの成長を見ていたい	17
家族のことを思うともう少し元気でいたい			2	
家族のために元気で長生きしたい			17	
初孫の知らせをきっかけに祖母役割を果たすことに生きがいを抱く			7	
家族役割を果たすまで生きていたい			13	
周りのために奮起したい			6	
生き抜きたい	生きる原動力への気付き	10		
	生き抜く道を探すために全力投球	19		
	強く生き抜きたい	23		
死にたくない	死にたくない	人生を全うする決意をしたこと	1	
		死におびえる	27	
		死ぬことについて考えてしまうこともあるけどやっぱり死にたくない	2	

*文献番号は表1と対応

に、《死におびえ》【死にたくない】という思いも存在していた。

2) 治療に関連したカテゴリー (表 3)

治療に関連したカテゴリーは、【生き続けることを治療に託す】【治らないといわれても治療への思いを棄てきれない】【終わりの見えない治療を受け続けるしかない】【根治できないことを受け入れるしかない】【治療の苦痛から解放されたい】の5カテゴリーであった。

患者は、《治療ができることは生きられること》と受け止め【生きることに希望を託し】ていた。また、【治らないといわれても治療への思いを棄てきれない】と治療に強い期待を抱き、根治を願っていた。一方、《生き続けるために副作用を甘受する》など【終わりの見えない治療を受け続けるしかない】と治療をやむを得ないものとして受け止める場合もあり、《がんとの共存を覚悟し》て【根治できないことを受け入れるしかない】という思いも見られた。さらに、《症状を抱えながら生きるのが辛》く、《状況によって気力のバランスが崩れそうにな》っており、患者が【治療の苦痛から解放されたい】と治療中止を望む思いも見られた。

3) 自己との折り合いに関連したカテゴリー (表 4)

自己との折り合いに関連したカテゴリーは、【今のままでいいから少しでも生きたい】【生きられると自分自身を励まし続ける】の2カテゴリーであった。

患者は自身の状況を《生かされている身であると痛感》し《今生きていることに感謝》しながら、治療や生への期待について《少しでも長く生きたい》《治らなくても今の身体の状態を維持したい》と【今のままでいいから少しでも生きたい】という思いを抱えていた。また《治療経験を生への自信に繋げ》、《がんに負けたくない》《生きることを願ってくれる人のために治療を受け続ける》と奮起しながら【生きられると自分自身を励まし続け】ていた。

VI. 考 察

1. 根治が目指せない進行がん患者が治療を受け続けること

根治が目指せない進行がん患者の「生きることへの思い」には治療が深く関与しており、それらは生き続けることを治療に託す思いから治療による苦痛から解放されたいという思いまで多様性が見られた。

一般的に根治目的ではない治療は延命を主軸としている

表 3. 治療に関連したカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	* 文献番号
生き続けることを治療に託す	治療ができることは生きられること	今の自分でも治療をやり切れる	6
		まだ治療ができる自己へ安堵	13
		抗がん剤を続けたい	17
		最後まで諦めずに化学療法の効果信じる	28
		生きるために残された可能性にかける	24
	生きる望みを治療に託す	積極的治療に一縷の望みをかける	4
		治療の効果に希望をもったこと	1
		自分の身体のためにやる	6
		必要な治療は受ける覚悟をしたこと	1
		治療せないかん状態	6
治らないといわれても治癒への思いを棄てきれない	今の治療でも治ると信じる	化学療法を受ければ肺がんは治ると信じる	3
		治療によってがんが治って欲しい	9
		治してもう少しだけ生きたい	6
	根治を願う	治癒する	21
		がんは治ると自分自身に諭す	28
		病気を治したいと強く思う	28
		病気を治して元気になる	15
		良くなる可能性が残っている	6
	良くなりしたい	ただ良くなりしたい	23
		治療を継続して良くなると信じる思い	20
終わりの見えない治療を受け続けるしかない	生き延びるための唯一の方法と理解する	抗がん剤治療しか残されていない現状の受け止め	18
		治る唯一の方法	21
		何とか助かりたいので化学療法に頼る	28
	生きるためには治療を受け続けるしかない	がん治療に対する諦めと奮起	13
		治療をやめたら死を待たなければならないのでがんが広がらないように一生付き合っていくしかない	2
		生きるためにきりがなく続く治療への覚悟	13
		先が不確かな治療でも生きるための続けていく	24
	生き続けるために副作用を甘受する	治療効果の可能性をあきらめずに治療を継続する意思と期待	22
		しびれがあっても命には代えられない	18
		肯定的に考えることでしびれを我慢	18
根治できないことを受け入れるしかない	苛酷な現状を受け入れる	化学療法の副作用は辛いが出すためには仕方ないと思う	3
		あきらめる	21
		仕方がないが受け入れて前に進む	9
		生も死も受け入れられる	27
		肺がんになったことは仕方がない	3
	運命だと思う	自分を受け入れる	14
		なりゆきに任せようとしたこと	1
		運命に任せる	21
		がんがあることを自覚し共存したい	5
		がんと穏やかに共存したい	27
がんとの共存を覚悟する	病氣と共存することを覚悟する	28	
	手術ができないなら、化学療法と上手く付き合っ一生継続していく覚悟をする	7	
	がんと共に歩める自分に気づく	23	
	がんでも生きて頑張っている人の存在がある	15	
	今を良しとして、これからがん付き合う覚悟をする	11	
治療の苦痛から解き放たれたい	症状を抱えながら生きるのが辛い	呼吸困難の出現と呼吸困難に伴う行動制限による希望の崩壊	26
		呼吸困難に伴う行動制限により生じた日常性の欠如による生きがいの喪失	26
		痛みがあると生きるのが嫌になる思い	20
	状況によって気力のバランスが崩れそうになる	しびれで妨害される自分らしい生き方	18
		自分らしい生活レベルと気力・体力の限界の探索化	4
		死は安らぎと思うくらい苦しい	19
	安楽な最期を望む	落ち着いた心・心穏やかではない2年間	19
		治療中止への迷い	9
	安楽な最期を望む	9	

* 文献番号は表1と対応

表 4. 自己との折り合いに関連したカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	* 文献番号
今のままでいいから 少しでも生きたい	少しでも長く生きたい	少しでも長生きしたい	2
		この先少しでも長く生きたい	10
		時の区切りとなる目安をおき、もう少し生きる	23
	生かされている身であると 痛感する	生かされている命に感謝する	23
		生かしてもらっていると感じる	16
		生かされている自分に気付く	27
		生きている醍醐味を実感する	16
		自然の偉大さを感じる	16
	今生きていることに感謝する	命の大切さを感じる	16
		生きていることに日々感謝する	16
		ありがたい	27
		今生きていてすごく幸せだと思う	15
		いつ死ぬかわからないので今を大事に過ごす	13
	治らなくても今の身体の 状態を維持したい	このままの体でいたい	9
		治らなくても現状維持してほしい	17
		完治できなくとも現状維持するための療養への取り組み	12
		これ以上ひどくなりたくないという恐怖心	20
		現在の状態でよしとしたこと	1
		治療の流れの見通しを立て、自己の力を維持する方法を考える	11
		今の生活を維持するために治療をしたい	8
		今までの生き方を継続する	16
		今までどおりに暮らしたい	17
		日常生活維持のため	6
	今と変わらない生活を送る ことを切望する	当たり前の日常がもたらす希望	10
		がんに影響されず今の生活を続ける	23
		自分の思いどおりの生活がしたい	8
		残された日常にすがり耐え忍ぶ	27
肺がんにとらわれず普段と同じように生活したい		3	
治療経験を無駄にしないため		6	
繰り返す治療から獲得した自信		13	
生きられると自分自身を 励まし続ける	乗り越える力への自信	10	
	死を遠ざけて、まだ生きられると自分にいい聞かせる	11	
	もっと生きたいという思いを糧にする	24	
	まだ生きられると自ら保証	10	
	肺がんには負けない	3	
	自分で自分を奮い立たせる	6	
	がんと闘う決意をしたこと	1	
	生きることを願ってくれる人のために治療を受け続ける	3	
	周囲の人々の存在が闘病意欲に繋がる	3	
	家族の強い要請により自分の気持ちに抗って積極的治療するための理由付け	4	
死に直結させて考えない	肺がんになったことを深刻には思わない	3	
	元来の前向きな性格による楽観視	13	
	考えても仕方がないと気持ちを切り替える	13	

* 文献番号は表1と対応

が、本研究で抽出された記述には延命という言葉はほとんど見られなかった。これは、患者が意識して使わなかった可能性も考えられる。また、患者は根治的治療を受けられない事実を否認しているわけではなく、どのような治療であっても根治への希望を棄てていないことが推察された。先行研究によると、がん患者が化学療法を継続する原動力の1つである化学療法の効果への期待が、がんと闘い自分らしい生を全うする覚悟を強めることが示唆されている(西川ら, 2015)。本研究の結果においても、患者が治療に対する強い期待を抱くとともに、それらを治療継続の拠り所としていることが考えられる。

一方、治療をやむを得ないものとして観念的に受け止

め、治療の苦痛から解き放たれたいという治療中止に繋がる思いも明らかになった。根治目的ではない治療は永続的、あるいは繰り返し行われることが多いため、患者は生活の変化を余儀なくされる。そして、出現する治療の副作用にその都度対処していかなければならないため、自己効力感を低下させてしまう(林ら, 2010)。また、定期的な治療効果の判定による緊張の連続と、がんの進行という不確実性を抱えながら生きていくことになりコントロール感覚を失いかねない(今泉ら, 2009)。根治目的ではない治療を受ける進行がん患者は、生き続けるために治療を受けなければならないという制約がある中で、治療に全面的に委ねる場合もあれば、治療によって身体的にも心理的にも

窮地に追いやられている場合もあり、一見あらゆる状況について納得して治療を受けているように見えても、治療に対する思いは個人さまざまであり濃淡があることが窺えた。

2. 自身の安寧を保つための方策を持つ

がんに罹患したとき、人は生きられる時間に対する認識が大きく変わり、見通せない曖昧な時間を過ごすことになる(川村, 2005)が、根治目的ではない治療を受ける進行がん患者は、既に再発、進行の経過を辿っており、治療過程のあらゆる局面で死との対峙を余儀なくされると考えられる。人生の瀬戸際に置かれた患者は、“生きていたい”“死にたくない”と強い生への希求を抱く場合もあれば、“今のままでいいから少しでも生きたい”と治療や回復ではなく現状維持を希望する場合もあることがわかった。死を意識する病を抱える患者は命を自然の中の神秘であると表し、「生かされている」という死生観をもつ(京田, 2010)といわれているが、根治目的ではない治療を受ける進行がん患者また、同様の思いを抱いていた。しかし、これらの思いには“少しでも”“治らなくても”といった婉曲的な表現も含まれており、根治が難しいからこそ生が自分ではどうにもならないものとして距離を置き、苛酷な現状への見方を緩和させていることが推察された。

さらに、患者は治療を受ける過程で培った経験を糧にして自信を獲得し、死に直結させて考えないようにするなどの対処をしながら、生きられると自分自身を励まし続ける様相が明らかになった。本来、希望は自己安心感の基盤の上であって、その安全基地の上に築かれるもの(渡辺, 2005)であるが、根治目的ではない治療を受ける進行がん患者は常にその安全基地が脅かされているといえる。そのような状況下においても孤独に自己との折り合いをつけながら過ごしている様相が示唆された。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、根治目的ではない治療および進行がん患者を対象とした国内の文献を扱ったが、がん種や治療法、治療期間による差異がある可能性がある。今後は患者が治療断念に至るほどの苦痛の要因を明らかにするとともに、治療過程における継続的な支援を検討していく必要がある。また、国外文献との比較検討も重要な課題である。

VI. 結論

根治目的ではない治療を受ける進行がん患者の「生きることへの思い」について文献検討を行った。対象文献28件を検討し、生死に関連した4カテゴリー、治療に関連した5カテゴリー、自己との折り合いに関連した2カテ

グリーを生成した。患者は命の限りを強く認識し、生きていたいと願っていた。生き続けることを治療に託し根治を期待する思いが見られる一方、治療をやらざるを得ないものと捉え、治療の苦痛から解放されたいという思いも見られた。患者の「生きることへの思い」には多様性があり、中でも治療に関する思いが複雑に絡み合っていることが示唆された。

利益相反: 本研究で開示すべきCOIはない。

本研究は、公益信託山路ふみ子専門看護教育研究助成基金の助成を受けて実施した。

■文献

- 明智龍男(2018). サイコオンコロジーの重要性－現状と今後の展望－. *精神医学*, 60(5), 447-454.
- 天野 薫 [小粥], 谷本真理子, 正木治恵(2012). がん治療を受けながら下降期を生きる人々の自己の回復. *日本看護科学会誌*, 32(4), 3-11.
- 青木君恵, 田邊美佐子, 神田清子(2008). 病を抱える患者の生き方・生きる意味をとらえた看護研究の動向と看護支援のあり方に関する課題. *群馬保険学紀要*, 29, 39-49.
- 新井敏子(2017). がんの再発あるいは転移を診断された乳がん患者の思い. *日本ウーマンズヘルス学会誌*, 15(2), 11-20.
- Felder, B. E. (2004). Hope and Coping in Patients With Cancer Diagnoses. *Cancer Nursing*, 27(4), 320-324.
- 濱田珠美, 小松浩子(2011). 標準的治療を受けている進行非小細胞肺癌患者の自己の見通しを持つ体験. *Palliative Care Research*, 6(2), 222-226.
- 橋本晴美, 神田清子(2011). 呼吸困難を抱える治療期進行肺癌患者の体験. *日本看護研究学会雑誌*, 34(1), 73-83.
- 林亜希子, 安藤詳子(2010). 外来がん化学療法患者における自己効力感の関連要因. *日本がん看護学会誌*, 24(3), 2-11.
- 平原優美, 河原加代子(2013). 外来化学療法中のがん患者の在宅療養生活と思い. *日本保健科学学会誌*, 15(4), 187-196.
- Hirai, K., Miyashita, M., Morita, T., Sanjo, M., & Uchitomi, Y. (2006). Good death in Japanese cancer care: a qualitative study. *Journal of Pain and Symptom Management*, 31(2), 140-147
- 今井芳枝, 雄西智恵美, 板東孝枝(2016). 転移のある高齢がん患者の治療に対する納得の要素. *日本がん看護学会誌*, 30(3), 19-28.

- 今泉郷子, 稲吉光子 (2009). 「がんサバイバーのコントロール感覚」の概念の特性. 日本がん看護学会誌, 23(1), 82-91.
- 井ノ下心, 小松浩子 (2012). 化学療法を受ける再発白血病患者の有害事象への対処行動. 日本がん看護学会誌, 26(2), 45-53.
- 一般社団法人日本がん看護学会教育・研究活動委員会コアカリキュラム ワーキンググループ (2017). がん看護コアカリキュラム日本版-手術療法・薬物療法・放射線療法・緩和ケア-. pp. 105, 235, 医学書院, 東京.
- Japan clinical oncology group (n.d.) 医学物理ワーキンググループ Medical Physics Working Group: MPWG, 2019年10月1日アクセス, <http://www.jcog.jp/basic/org/group/mpwg.html>
- 神谷潤子 (2015). 化学療法を受けている再発がん患者の希望の維持に影響するソーシャル・サポート. 日本赤十字看護学会誌, 15(1), 11-19.
- 川村三希子 (2005). 長期生存を続けるがんサバイバーが生きる意味を見いだすプロセス. 日本がん看護学会誌, 19(1), 13-21.
- 川崎優子, 内布敦子, 荒尾晴恵, 大塚奈央子, 滋野みゆき (2011). 外来化学療法を受けているがん患者の潜在的ニーズ. 兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要, 18, 35-47.
- 北添可奈子, 藤田佐和 (2008). 外来化学療法を受けるがん患者の "前に向かう力". 日本がん看護学会誌, 22(2), 4-13.
- 木庭淳子 (2017). がんサバイバーのスピリチュアルペインに関する文献検討. 日本赤十字秋田看護大学紀要・日本赤十字秋田短期大学紀要, 22, 75-86.
- 熊谷理恵, 野澤明子 (2013). 急性白血病患者における臨床試験参加の意思決定プロセス. 日本看護研究学会雑誌, 36(2), 23-34.
- 京田亜由美, 神田清子, 加藤咲子, 中澤健二, 瀬山留加, 武居明美 (2010). 死を意識する病を抱える患者の死生観に関する研究内容の分析. *The Kitakanto Medical Journal*, 60(2), 111-118.
- McClement, S. E., & Chochinov, H. M. (2008). Hope in advanced cancer patients. *European Journal of Cancer*, 44(8), 1169-1174.
- 三木幸代, 雄西智恵美 (2014). オキサリプラチンによる末梢神経障害をもつ進行再発大腸がん患者の体験. 日本がん看護学会誌, 28(1), 21-29.
- 三本芳, 藤田佐和 (2012). 放射線治療を受けているがん患者の不確かさと対処. 日本がん看護学会誌, 26(2), 76-85.
- 許田志津子, 葉山有香, 大石ふみ子 (2011). 外来化学療法を受ける患者にとっての悪性リンパ腫とともに生きる体験. 大阪大学看護学雑誌, 17(1), 7-16.
- 村田久行 (2011). 終末期がん患者のスピリチュアルペイントそのケア. 日本ペインクリニック学会誌, 18(1), 1-8.
- 長坂育代, 眞嶋朋子 (2013). 外来で化学療法を受ける乳がんの女性が不確かさと折り合いをつけるプロセスを支える看護介入. 日本がん看護学会誌, 27(1), 21-30.
- 内藤加奈子, 鈴木久美, 山内栄子 (2017). 進行臓器がん患者の積極的治療継続の決定に至る過程. 医療の広場, 57(2), 18-22.
- 新村出 編 (2018). 広辞苑 第七版, p.143. 岩波書店, 東京.
- 西川奈津美, 船橋眞子, 黒田寿美恵 (2015). がん患者の化学療法継続の原動力に関する文献検討. 日本看護福祉学会誌, 20(2), 17-29.
- 小原佑佳, 若崎淳子, 掛橋千賀子 (2016). 再発肝臓がん患者の状況認識. ヒューマンケア研究学会誌, 8(1), 11-19.
- 太田亜紀子, 岡本明美, 宮津珠恵 (2018). 進行肺がん患者が初回化学療法を受ける時期に抱く思い. 医療看護研究, 14(2), 42-49.
- 奥村美奈子, 布施恵子, 浅井恵理, 宇佐美利佳, 森仁実 (2016). 外来化学療法を受けている高齢がん患者の療養生活の現状. 岐阜県立看護大学紀要, 16(1), 97-103.
- 笹井知子, 雄西智恵美 (2016). 診断から初回治療導入期における肺がん患者の不確かさの管理. 日本がん看護学会誌, 30(1), 73-81.
- 千崎美登子 (2016). 化学療法を受けている進行臓器がん患者の療養生活における体験手術適応にならなかった患者を対象として. 北里看護学誌, 18(1), 9-20.
- 下出真規子, 浦和あざみ, 大石牧奈, 小松礼奈, 宮下朋子, 森本悦子 (2018). 外来化学療法を受ける高齢がん患者の生きがい. 高知女子大学看護学会誌, 44(1), 166-173.
- 志和知華, 岡光京子 (2016). 進行肺がん患者の退院支援における意思決定の影響要因. 日本看護倫理学会誌, 8(1), 48-55.
- 竹山広美, 岡光京子 (2015). 進行肺がん患者の病いの体験の意味づけに関する研究. 日本看護福祉学会誌, 20(2), 85-95.
- 田中いずみ (2012). 再発・転移後のがん患者が見いだす希望とその希望を見いだすための要因. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 8(1), 39-47.

- 塚本仁美, 岡光京子 (2018). 診断から治療過程におけるがん患者のゆらぎの対処. 看護・保健科学研究誌, 18(1), 21-30.
- 角田明美, 望月留加, 神田清子 (2016). 死を認知した再発・進行がん患者が希望を見いだすプロセス. *The Kitakanto Medical Journal*, 66(3), 201-209.
- 上田由喜子 (2015). 外来で治療を受けるがん患者の希望を見出すプロセス. 看護実践学会誌, 28(1), 17-27.
- 梅田尚子, 岩田浩子 (2015). 初回治療段階にある中年期の悪性神経膠腫患者の体験のゆらぎ. 日本がん看護学会誌, 29(3), 29-39.
- 渡辺弘純 (2005). 希望の心理学について再考する－研究覚書－. 愛媛大学教育学部紀要, 52(1), 41-50.
- 山中政子, 鈴木久美, 佐藤禮子 (2016). がん疼痛のある進行肺がん患者の情動体験. 日本がん看護学会誌, 30(1), 23-33.
- 吉田みつ子 (2014). 難治性のがんを生き抜く膵がん患者の語り. 日本がん看護学会誌, 28(2), 15-22.

【要旨】 本研究は、根治目的ではない治療を受ける進行がん患者の「生きることへの思い」について明らかにすることを目的とした。医学中央雑誌 Web にて検索キーワードを「がん」and「患者」and「治療」and「(生きたい) or (生きる) or (希望) or (体験) or (思い)」として対象文献 28 件を抽出した。各文献からコードを抽出し質的帰納的に分析した結果、11 カテゴリーが生成された。カテゴリーは、【命の限りを強く意識する】【生きていたい】などの生死に関連した 4 カテゴリー、【生き続けることを治療に託す】【終わりの見えない治療を受け続けるしかない】【治療の苦痛から解き放たれたい】などの治療に関連した 5 カテゴリー、【今のままでいいから少しでも生きたい】【生きられると自分自身を励まし続ける】の自己との折り合いに関連した 2 カテゴリーが見出された。患者の「生きることへの思い」は多様な思いが存在しており、中でも治療に関連した思いは複雑に絡み合っていることが明らかになった。

受付日 2019 年 9 月 4 日 採用決定日 2019 年 10 月 28 日